



No. sma0050

(2021.3.25)

サントリー美術館 開館60周年記念展
「ざわつく日本美術」開催

会期：2021年7月14日（水）～8月29日（日）



尾上菊五郎 一枚 明治8年（1875）頃 サントリー美術館

サントリー美術館（東京・六本木／館長：鳥井信吾）は、2021年7月14日（水）から8月29日（日）まで、サントリー美術館 開館60周年記念展「ざわつく日本美術」を開催いたします。

ある作品を見た時、「えっ？」「おっ！」「うわぁ…」などと感じたことはないでしょうか？本展では、こうした言葉にならない「心のざわめき」を、作品をよく見るための、大切なきっかけと捉えてみます。というのも、「いったい私は、この作品のどこにざわついたのだろう？」と考えることで、目の前の作品により一層興味を覚えるからです。

そこで今回は、思わず「心がざわつく」ような展示方法や作品を通して、目や頭、心をほぐし、「作品を見たい！」という気持ちを高めていきます。サントリー美術館の名品から珍品、秘宝まで、作品を「見る」という行為を意識して愉しみながら、日本美術のエッセンスを気軽に味わっていただける展覧会です。

作品との出会いによって沸き起こる、自分自身の「心のざわめき」に耳を傾けると、日本美術の魅力にぐっと近づけるような、意外な発見があるかもしれません。

《 展示構成 》 ※出品作品はすべてサントリー美術館所蔵

第1章： うらうらする



重要文化財 色絵五艘船文独楽形鉢（底裏） 有田
一口 江戸時代 18世紀



能面 小面（裏面） 是閑吉満
一面 桃山時代 16～17世紀

いつもは正面や表面を向いて展示される作品をひっくり返すと、思いがけない顔に出会えます。そうした「裏の顔」は時として、作品の秘めた本性をも教えてくれます。

たとえば、江戸時代後期に作られた重要文化財「色絵五艘船文独楽形鉢」は、五隻のオランダ船の文様をうつわの内外に配した作品で、底裏に「寿」の一字が記されています。当時の人々が、海を越えて宝物を運んでくるオランダ船を「宝船」に見立てて尊んだことを踏まえると、この「寿」字は、本作の吉祥性を象徴的に表しているとも考えられます。

本章では、やきものや能面、屏風、染織など、さまざまなジャンルの作品を取り上げ、それらの裏側がよく見える展示を試みます。裏にこそそうかがえる制作者の技量や、裏にもこだわる日本ならではの美意識を、じっくりお楽しみください。

【主な出品作品】

- | | | | | | |
|-----------|--------------------------|----|------|------|---------|
| ・重要文化財 | 色絵五艘船文独楽形鉢 | 有田 | 一口 | 江戸時代 | 18世紀 |
| ・能面 小面 | 是閑吉満 ^{ぜ かんよしみつ} | | 一面 | 桃山時代 | 16～17世紀 |
| ・多賀社参詣曼荼羅 | | | 二曲一隻 | 室町時代 | 16世紀 |
| ・東こぎん | | | 一枚 | 江戸時代 | 19世紀 |

第2章：ちょきちょきする



重要文化財 佐竹本・三十六歌仙絵 源順
伝 藤原信実 画／伝 後京極良経 書
一幅 鎌倉時代 13世紀



富士鷹茄子松竹梅模様筒描蒲団地
一枚 昭和時代 20世紀

いま目の前にある姿が、その作品の制作当初の姿とは限りません。意外な事実のようですが、美術品にはしばしば、「切断」された歴史があるからです。

当館の名品を例に挙げると、掛軸の豪華な表装が目を引く重要文化財「佐竹本・三十六歌仙絵 みなものしたごう 源 順」は、100年ほど前までは長い絵巻物の一部でした。また、扇を手には舞う6人の女性を描いた「舞踊図」は、現在ではそれぞれ額装されていますが、かつては六曲屏風であったと言われています。

本章では、絵巻から掛軸へ、屏風から額装へ、あるいは蒲団の表地から布へ、
 というように、姿が改変されたと思われる作品を集めます。制作当初の姿を想像
 しながら作品を見られる展示を一部取り入れながら、「切斷」の背景やその行為に
 関わった人々の想いに触れていきます。

【主な出品作品】

- | | | | |
|----------------------|----|-----------|------|
| ・重要文化財 佐竹本・三十六歌仙絵 源順 | | | |
| 伝 藤原信実 画／伝 後京極良経 書 | 一幅 | 鎌倉時代 | 13世紀 |
| ・富士鷹茄子松竹梅模様筒描蒲団地 | 一枚 | 昭和時代 | 20世紀 |
| ・舞踊図 | 六面 | 江戸時代 | 17世紀 |
| ・水色地震牡丹枝垂桜流水菊菖蒲模様裂地 | 一幅 | 琉球王国～明治時代 | 19世紀 |

第3章： じろじろする



茶練緯地宝尽模様腰巻
一領 江戸時代 19世紀



色絵鳳凰文大皿 有田
一枚 江戸時代 17世紀

ひとくちに作品を「よく見る」と言っても、それは容易なことではありません。しかし、よく見ることを愉しんだ先には必ず、「ぱっと見」では知りえない発見があるはずです。

たとえば、日本の伝統的な吉祥文様である「宝^{たから}尽^{づくし}」を、着物全体にみっしりと刺繍した作品をよく見ると、現代の私たちには宝物とは思えないような、不思議な物体であふれていることに驚かされます。一方、「色絵鳳凰文大皿」は、中央の大きな鳳凰文に目を奪われがちですが、その周囲をよく見ると、暗い紫色の背景のなかに多彩な文様が隠れていることに気づきます。

本章では、細かすぎて見えない部分や剥落して見えない部分、はたまた「心の目」でしか見えない部分まで、すみずみまで凝視したくなるような作品をご紹介します。

【主な出品作品】

- ・茶練緯地宝^{ちやねりぬきじ}尽^{たからづくし}模様腰巻 一領 江戸時代 19世紀
- ・色絵鳳凰文大皿 有田 一枚 江戸時代 17世紀
- ・鍍金龍文螺鈿^{せつそうぼこ}説相箱 一合 江戸時代 19世紀
- ・梅蒔絵香合 一合 平安時代 12世紀

第4章： ばらばらする



貝尽蒔絵硯箱 小川破笠
一合 江戸時代 18世紀



色絵卷子形水注 薩摩
一合 明治時代 19世紀

離れてみてはじめて、お互いが大切な存在であることに気づく…、それは作品の場合も同じかもしれません。身も蓋もない発想ですが、本来セットであるはずの作品を、あえてばらばらに並べてみると、いったい何が見えてくるのでしょうか。

本章では、「貝尽蒔絵硯箱」といった硯箱の名品をはじめとして、一風変わった蓋のついたやきものや漆工、金工など、身と蓋から構成されるセット物の作品を多数取り上げます。いつもと異なるのは、身と蓋が一定の距離を保って展示されていることです。

離れているからこそ、文様や形、技法の違いをよく見極め、身と蓋がセットであることの意味を意識的に考えることができるでしょう。時に使い手の驚きまで計算されたセット物のデザインの妙に、改めて気づかされるはずです。

【主な出品作品】

- | | | | | |
|-------------|-------------|----|------|------|
| ・貝尽蒔絵硯箱 | 小川破笠 | 一合 | 江戸時代 | 18世紀 |
| ・色絵卷子形水注 | 薩摩 | 一合 | 明治時代 | 19世紀 |
| ・重要文化財 | 桐竹鳳凰蒔絵文台・硯箱 | 一具 | 桃山時代 | 17世紀 |
| ・朱漆塗ガラス絵蓋付椀 | | 五合 | 江戸時代 | 19世紀 |

第5章： はこはこする



笙 銘 小男鹿丸 行門
一管 鎌倉時代 建保3年（1215）



国宝 浮線綾螺鈿蒔絵手箱
一合 鎌倉時代 13世紀

展示室で見る姿が作品の「ON」の状態だとすると、「OFF」の状態とはどんな姿でしょうか。特に日本の古美術は、蒲団のような緩衝材に包まれながら、固い箱のなかで休んでいます。作品を保管する収蔵庫に入ると、そこにあるのは箱、箱、箱…、ずらりと箱ばかりが並んでいるのです。

本章では、あまり知られていない「箱」の世界をご紹介します。大切な美術品を外部の衝撃から守る箱は、大きさや形、材質がさまざまです。また箱には、美術品の価値を左右する文字が記されることもあります。さらに、箱が本来の機能を超えて、美術品本体をしのぐほどに装飾されるという「主客転倒」まで起こっています。

ついついきれいなお菓子の箱を集めてしまう「箱好き」の方も、そうでない方も、日本ならではの箱文化の一端をお愉しみください。

【主な出品作品】

- ・笙 銘 ^{さ お しかまる}小男鹿丸 行門 一管 鎌倉時代 建保3年（1215）
- ・国宝 浮線綾螺鈿蒔絵手箱 一合 鎌倉時代 13世紀
- ・黒樂四方茶碗 銘 山里 樂道入 一口 江戸時代 17世紀
- ・亀貝尽螺鈿蒔絵盃・波鴛鴦螺鈿蒔絵盃台
永田友治 一具 江戸時代 18世紀

第6章：ざわざわする



袋法師絵巻（部分）
一巻 江戸時代 17～18世紀



墨梅図 伊藤若冲（「棲鸞園画帖」のうち）
一枚 江戸時代 18世紀

一見地味に感じられたり、難しいと思われがちな日本美術のなかには、思わず「心がざわつく」ような作品がたくさんあります。

本展のメインビジュアルである「尾上菊五郎」は、明治時代初期に作られた石版画の役者絵ですが、どこか違和感を覚える生々しさに満ちています。また、当館の秘宝とも言うべき「袋法師絵巻」には、胸に手をあてる女性の背後に置かれた袋の下から、男の顔が不気味にのぞいています。さらに、奇想の画家・伊藤若冲による「墨梅図」は、タイトルを知らなければ何を描いたものかわからないほど、モチーフが大胆にデフォルメされています。

美術品だからといって「美しい」と感じなければならない理由はありません。私たちのさまざまな「心のざわめき」を受け止めてくれるような、日本美術の懐の深さをご紹介します。

【主な出品作品】

- ・ 袋法師絵巻 ふくろのほうし 一巻 江戸時代 17～18世紀
- ・ 墨梅図 伊藤若冲（「棲鸞園画帖」のうち）
一枚 江戸時代 18世紀
- ・ 放屁合戦絵巻 一巻 室町時代 文安6年（1449）
- ・ 美人図 にしかわすけのぶ 西川祐信 一幅 江戸時代 18世紀

【本展における展覧会関連プログラム】

◎トーク「わいわいする！ざわつく日本美術展のできるまで」

[今までにない（当館比）コレクション展である本展の企画から展示まで、担当者による裏話／事前申込優先]

7月25日（日）、8月15日（日）

各日11時～、14時～（各回約40分）

参加無料（別途要入館料）

*当館ウェブサイトよりお申込みください。先着順。空席がある場合に限り、当日参加も可能です。

◎ざわざわしてる？心のざわつきを聴く「静寂鑑賞会」

[会話、撮影禁止の静かな空間で作品に向き合ってみませんか。人数限定貸し切り鑑賞会／事前申込制]

8月18日（水）19時～21時 定員：50名 応募締切：7月25日（日）

参加無料（別途要入館料）

*当館ウェブサイトよりお申込みください。応募多数の場合は抽選、結果は当選者のみにお知らせします。

*展示室内での会話および撮影はご遠慮いただきます。

◎ウェブサイトでは、展覧会に関連した動画を公開予定です。

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報はウェブサイトをご覧ください。

その他のプログラムを開催する場合もウェブサイトでご案内します。

サントリー美術館 開館60周年記念展
「ざわつく日本美術」

▼会 期：2021年7月14日（水）～8月29日（日）

※作品保護のため、会期中展示替を行います。

※会期は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。

▼主 催：サントリー美術館、朝日新聞社

▼協 賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、サントリーホールディングス

▼会 場：サントリー美術館

東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階

〈最寄り駅〉 都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結

東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結

東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

【基本情報】

▼開館時間：10時～18時

※金・土および7月21日（水）、22日（木・祝）、8月8日（日・祝）は20時まで開館

※いずれも入館は閉館の30分前まで

※開館時間は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。

▼休 館 日：火曜日（ただし8月24日は18時まで開館）

▼入 館 料：

・当 日 券：一般1,500円、大学・高校生1,000円、中学生以下無料

・前 売：一般1,300円、大学・高校生800円

※サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、ローソンチケット、セブンチケットにて取扱

※前売券の販売は展覧会開幕前日まで

※サントリー美術館受付での販売は開館日のみ

▼割 引：

・あとり割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引

※割引適用は一種類まで（他の割引との併用不可）

▼呈茶席（お抹茶と季節のお菓子）

日 時：7月15日（木）・29日（木）、8月12日（木）・26日（木）

12時、13時、14時、15時にお点前を実施

（お点前の時間以外は入室不可、及びお抹茶とお菓子は召し上がれません。）

会 場：6階茶室「玄鳥庵」 定員：各回12名／1日48名

呈茶券：1,000円（別途要入館料）

※呈茶券は当日10時より3階受付にて販売（予約不可、先着順で販売終了、お一人様2枚まで）

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報はウェブサイトをご覧ください。

▼一般お問い合わせ：03-3479-8600

▼美術館ウェブサイト：<http://suntory.jp/SMA/>

▽プレスからのお問い合わせ：〔学芸〕久保、関〔広報〕光田

メールでのお問い合わせ、及びプレス用画像ダウンロードのお申し込み：

2021年3月25日（木）から https://www.suntory.co.jp/sma/info_press/

以 上